

特集：大学教育における英語について考える

趣 旨

外国語は、大学で学ぶ者にとって不可欠な手段である。研究は本来国際的なものであり、言語の壁を理由に自らの母語にとどまっていると、満足な成果を上げられない。外国語による文献・論文を読むことは、大学で学ぶ者にとって基本中の基本の作業である。たんに読むだけでなく、みずからの研究成果を発信すること、そのために外国語で正確に文章を書くこと、さらにはそれを口頭で発表することは不可欠である。そのことは、専門分野の如何を問わない。

ただし、外国語の文献を一定時間内に正確に読むこと一つをとっても、決して容易ではない。多少ともそのことに苦勞している学生は多い。彼らは入試合格のために大学入学前には必死に学習したはずだが、入学後の状況からはその学習効果を感じることは難しい。その理由の一つは、大学での外国語の授業時間数が限られていることであろう。自己学習で補えば問題は少ないはずだが、それを行っている学生は多くない。日々の学習・鍛錬を怠れば、どのような能力であれ衰退することは当然であり、とりわけ外国語はその傾向が強い。大学入学時の学力水準がもっとも高く、時間の経過とともに低落する。上級学年の学生ほど外国語が苦手になるという珍妙な現象が現れる。それをやむを得ないこととして、諦観に近い見方もこれまで大学の一部になかったとはいえない。現実にはどの専攻分野でも、学年の進行とともに外国語を使用する頻度は高くなる。経済、研究、教育、文化等の多方面でグローバル化が進む中で、今後大学は外国との交流の場面が増え、外国語を駆使することが、今以上に求められるようになる。在学中だけでなく、卒業後にはさらに外国語能力を必要とする場面が増えることも十分に予想される。

外国語の活用機会が増えることは、教員も同様であろう。国際的

な学術交流は活発化しているし、留学生の数も増えている。今後、名古屋大学では今以上にその傾向が顕著になる可能性もある。教育面でも外国語を使う場面、たとえば外国語で授業を行ったり、学生の指導を外国語で行う場面も多くなるかもしれない。そこで本号では、研究大学の学士課程における英語教育のあり方を取り上げることとした。外国語の中でもとりわけ英語の占める位置が大きいことを考慮して、英語に焦点を絞る。名古屋大学では、全学教育としての英語教育の改善に向けた検討作業が続けられてきた。2009年度からは、その成果をふまえて、新しい内容・方法の英語教育カリキュラムが教養教育院でスタートする。一方、留学生の増加に対応すべく、英語による授業を増やすことも全学的に追求されている。

本特集では、名古屋大学で英語教育および英語による教育に取り組んでこられた方々に執筆していただいた。まず英語教育について改善作業を進めてこられた方々に、改善内容をご紹介いただくとともに、英語教育に関するご自身の考え方・経験などを交えて語っていただいた。長畑氏には英語新カリキュラムの概要と特徴について、鈴木氏にはネットワーク型プレゼン授業のあり方について、杉浦氏には英語による学術論文の読解・執筆・発表能力の形成について、さらに滝沢氏には学問研究に資する英語教育のあり方について、それぞれ執筆いただいた。一方、各部局レベルでの英語教育の現状と改善の方向に関連して、井上氏に工学研究科・工学部の状況について報告をお願いした。中井氏には、英語の授業を担当する教員向けにサポート教材を作成した立場から、教材開発の背景・経緯とともに、学内での教材に対する反応について報告いただいた。

大学における外国語の役割は大きく、外国語能力の確実な形成・向上をめざす授業はますます重要になる。名古屋大学としてこれにどう向き合うかは、全学的な課題といえる。この課題に向けて、名古屋大学における外国語をめぐる議論が活性化すること、本特集がその一つの契機になることを願っている。

編集委員長 夏目達也